

竹磴若年の詩詞文

― 集外詩詞四十九首及び佚文五篇 ―

萩原 正樹

はじめに

森川竹磴（名鍵蔵、字雲卿、号鬢絲禪侶）は、明治二（一八六九）年六月十四日に生まれ、大正六（一九一七）年九月七日に四十九歳の生涯を終えた。その短い一生の間に、竹磴はすべて十一種の単行本を刊行している。^①また雑誌連載のみで未刊の著作も多く、特に畢生の大著『詞律大成』が、公刊されぬままその大半が散佚したことは、なんとも惜しまれよう。さらに看過できない重要な業績として、『槐南集』（二十八卷、文会堂書店、明治四十五年三月）及び『春濤詩鈔』（二十卷、文会堂書店、明治四十五年五月）両書の校正編集の仕事が挙げられる。竹磴にとっては岳丈・義兄に当たる春濤・槐南父子は、言うまでもなく明治詩壇の雄であり、現在においても高く評価されているが、その高評

の前提として、綿密な校正のもとに生涯の詩業をほぼ網羅した詩集の存在という条件があることを忘れてはならないであろう。『槐南集』『春濤詩鈔』両書は、竹磬の才華と学識があつてはじめて成つたと言つてもよく、その功については従来あまり触れられないが、もっと強調されて良いのではないかと思う。

以上のような編著書のほか、竹磬は生涯にわたつて大量の詩文、詞曲を残している。だが生前に刊行された詩文集は、『得間集』二卷一冊（明治二十四年、鷗夢吟社刊）のみであり、そこにはごく初期の文八篇（含「自序」、詩七十二首、詞三十一闋、曲二闋が収められているに過ぎない。その他の多くは、『鷗夢新誌』『随鷗集』等の雑誌に掲載されており、生前にそれらを整理編集して公刊されることはなかったのである。

竹磬の死後、久保天随が「竹磬集」と題してその詩のみを『随鷗集』に連載したが、その典拠となつていたと思われるのが、天随珍藏の『夢余稿』（四卷）である。『夢余稿』は、水原渭江氏が「森川竹磬の自筆の原稿ではないが、久保天随が竹磬歿後に香雨夫人の協力を得て、篋底の草稿を浄写させたもので、竹磬の詩詞曲集としては、もっとも信頼の出来る資料である」（『聴秋仙館詩稿』序、森川竹磬遺稿刊行会、一九六七）と述べておられるごとく、門下の天随と竹磬夫人であつた孝子（香雨）の元から出たもののようで、その詩集として最もまとまつたものである③。この『夢余稿』が、水原氏の手によつて『聴秋仙館詩稿』（二卷、詩八七八首）、『夢余稿詞集』（二卷、詞五九二闋、曲二十闋、国際芸術文化交流委員会、一九八九）として出版され、これが現在我々が竹磬の詩詞曲を読む際の基本資料となつている。ただ『夢余稿』は、水原氏も「幼いころの『得間集』にみえる作品もあれば、ごく晩年の作品もあつて、生涯の全作品を網羅してはいないが、草稿にもとずいただけあつて作者の好尚による自撰的な内容をもっているのは、何といつても有難い」（『聴秋仙館詩稿』序）と言われるように、竹磬による取捨選択が行われていたようで、すべての作品を載録しているわけではない。その選録は作者竹磬の見識を示すものであり、もちろん尊重しなければならな

いが、その文学や生涯を考究するためには、たとえそれが竹礫の意向に添わない作品であっても、可能なかぎりすべての作品を収集して吟味検討を行う必要があることは、論を俟たないであろう。

竹礫の場合、『夢余稿』未収の作品はおおむね前述のような漢詩文雑誌に収載されていると思われるが、明治大正期のさまざまな漢詩文雑誌、なかでも発行部数の少なかつたものを所蔵する機関は非常に少なく、また所蔵されているのも処々に欠号が見られる場合がほとんどで、その調査はなかなか困難である。その文業の全貌を明らかにするのは後日に期することとし、本稿では竹礫十代の頃の詩詞四十九篇及び文五篇を紹介し、『夢余稿』の遺漏を補っておきたい。いずれも竹礫にとっては習作のような作品であったのであろうが、少青年期の竹礫を知る上で、貴重な資料である。

一、「葦竹新篇」所収詩文

「葦竹新篇」（第一集のみ「葦竹吟篇」と題す）は、明治十七（一八八四）年十一月に創刊された月刊雑誌で、同十八年十月刊行の第十二集までが国立国会図書館に所蔵されている。第十三集以降も刊行されたかどうかは不明である。第一集の巻頭には、溝口桂巖の次のような序文が掲載されている。

気変則声変。近時之文詩、係維新前者、多成於劍光砲声之間。是故使人激烈。又係建囊後者、多成於玩月賞花之間。是故使人狂蕩。是其氣變而声變者也。頃者、河辺太田森本三君、徧采四方之文詩、裒以爲卷、請諸名家評正。例月印行、名曰葦竹吟篇、属余一言。余曰、其意蓋在淇澳詩、欲使學者切磋琢磨、以若彼竹之美盛耶。果然、則在激烈狂蕩之外。三君笑頷之。是爲序。明治十七年十一月、桂巖仙史溝口恒、識於湖光山色詩閣南榮之下。

溝口桂巖は、現在の相模原市出身で、相模湖町には今もその住居跡が残され、町の文化財に指定されている。大沼枕山の下谷吟社から出て詩人・漢学者として名を成し、後に埼玉県吏となっている。序文に見える河辺（錦之丞）、太田（勝敬）、森本（鉦太郎）は、桂巖の弟子であったようで、「葦竹新篇」は彼ら三名が中心となって編集、出版の④ことを行っていた。詩文の評正者には、桂巖、大沼枕山のほか、亀谷省軒、市川楸村、岩溪裳川、馬杉雲外、大江敬香らが名を連ねている。

発行所は「松莊館」で、第一集奥付には「東京麹町区三番町三十四番地 松莊館」と記されている。「三番町三十四番地」は当時の竹磑の住所であり、また「松莊館」は、森川竹磑の父・莊次郎、森川義利の室号であると考⑤えられ、明治十六年末の父の死後、それを冠して自宅を発行所としたのであろう。父の生前にも「松莊館」はいくつかの出版事業を行っており、「葦竹新篇」発刊に際しても資金的な支えとなったと考えられる。さらに奥付には「補助 東京麹町区三番町卅四番地 森川竹磑」とも見え、数え歳十六・七であった竹磑も編集に関わっていたことが知られる。あるいはこの頃には、竹磑は既に桂巖・雲外の門に入っていたのかもしれない。また当時竹磑は、大江敬香の愛琴吟社にも出入していた。⑦

「葦竹新篇」には、每号十篇前後の文と四十首程度の詩が収録され、課題の所詠を競い合う「闘詩」欄も設けられていた（第一集及び第十二集を除く）。竹磑の作品は、第一、二、三、六、八、十、十二集に、文三篇、詩四首が録されており、これらは現在知り得る範囲では、竹磑最初期の作品群ということになる。

〔文三篇〕

○范増論（「葦竹新篇」第二集、明治十七年十二月）

蘇子瞻曰增之去、善矣、独恨其不早耳。在羽殺卿子冠軍之時也。吾以意不然、秦所以急亡者、鉅鹿之戰也。羽既戰於鉅鹿而勝、然宋義若在焉、乃其不能勝也必矣。何則宋義久留安陽、不恤士卒、而徇其私、此其當誅也。羽若不殺之、則沛公必殺之矣。增何以為去哉。增以此時不去、可謂善知機者矣。或曰、增勸羽殺沛公、羽不聽、乃羽之不用增、可知也。正以此時而去可矣。曰、否。增欲殺沛公、人臣之分也。羽不聽、是有君人之度也。增何以為去哉。曰、然則當於羽殺義帝之時而去、可矣。曰、否。增勸項梁立義帝、梁從之。增又勸羽殺沛公、羽不聽。增曰、奪項王天下者、必沛公矣。夫六國並立、而義帝為盟主。天下豈羽之有哉。而欲以天下歸項王、是增之心無義帝也。由此觀之、前日立義帝者、陽収民望也、安知羽不弑、則增弑之。增謝羽而歸也、是增之計已盡也。假令增欲早去、亦無可去之時。況於無去志乎。余以謂子瞻之論、蓋誤矣、何足以信。乃錄之質諸世云。

○庸堂記（「葦竹新篇」第六集、明治十八年四月）

天有日月星辰、而品物亨、是庸也。地有山川田野、而万物育、是庸也。人順五常而行、是庸也。天地已非庸不可矣。人介乎天地之間、豈可無庸哉。古之人有喪之而亡者焉、桀紂是也。古之人有得之而興者焉、禹湯是也。庸之係於人、大矣哉。頃者、湊蓬舟号其堂曰庸、請記於余。余曰、子以庸名堂者、其意在於守常歟。果然則在日夜黽勉、終始不變也已。亦何俟吾言哉。只願子不背於庸堂之名焉。明治甲申十二月、竹溪逸史森川鍵、書於三番坊之竹風鏘鏗如佩環鳴處。

○習說（「葦竹新篇」第十集、明治十八年八月）

人性皆善也。苟欲明善以復其本、則不可不習也。然習為善、又為不善矣。余聞、舜之為人也、仁義之人也。吾欲如舜、則去不如舜者。習舜所為、則可以為如舜也。孟子曰、聖人與我同耳。宜哉言也。夫習之為字、羽白也。鳥子將出巢時、日日奮羽而習飛、然後出巢、是習之所因也。人而習不善則失其性、習善則復其本矣。嗚呼習之不同、豈啻一差千里而已哉。

〔詩四首〕

○詠松（「葦竹吟篇」第一集、明治十七年十一月）

風雨不撓韻縱縱、雪霜不屈綠重重。

衆木雖高節不勁、群花雖艷色凡庸。

君不見仲尼曾以君子視、又不見秦王猶以大夫比。

大丈夫子真不背、木公操在歲寒裏。

○雪中偶成（「葦竹新篇」第三集、明治十八年一月）

夜深風急轉淒然、飛雪滿庭春始天。

十二樓台為玉閣、三千世界化銀氈。

何來雀影隨閑域、既去鴻聲度遠川。

他日炎塵人苦渴、知斯一片幾多錢。

○烏衣歌（「葦竹新篇」第八集、明治十八年六月）

雌如送雄雄如迎、飛飛含泥巢未成。

梨花雨白春愁冷、柳葉風青午舞輕。

烏衣烏衣吾問汝、秋日何地處、春来自何所。

更覓旧主門戶飛、呢喃梁幕互相語。

烏衣汝勿冲碧穹、謾作高飛恐無功。

君不見野鶴凌雲天上宿、却遭網羅俎其肉。

未若低飛守旧巢、烏衣烏衣吾只憐汝族。

○竹軒吟（「葦竹新篇」第十二集、明治十八年十月）

脩竹軒下靜看竹、看向竹軒好賦竹。

百花卉木孰如竹、庭園自宜多植竹。

檐外寒梅已伴竹、門前蒼松又連竹。

安排奇石近依竹、位置幽蘭斜遶竹。

鬱猗何唯淇澳竹、堅勁豈必雲夢竹。

竹軒軒外亦有竹、春風秋雨常宜竹。

晨夕煮茶獨對竹、迎賓引友俱賞竹。

節烈清高莫如竹、何可一日無此竹。

四時之榮唯在竹、吾性愛竹竹軒竹。

なお、「葦竹新篇」第三集所収の「雪中偶成」詩には、山崎萩村と内山松堂の次韻詩があり（それぞれ「葦竹新篇」第四集、第六集に載録）、「次竹礫森川詞宗韻」「次竹礫森川詞宗之玉韻」と小題が附されている。また竹礫の原詩は不明であるが、松崎蘭香に「秋日偶成、歩森川竹礫詞宗韻」（「葦竹新篇」第十二集）と題する詩も見える。竹礫を「詞宗」と称するのは、おそらくは若者同士の冗談めかした言い方であろうが、友人や門生たちの間で竹礫の詩才が瞠目されていたという一面の事実を物語っているようにも思われる。

二、「海内詩媒」所収詩

「海内詩媒」は、大阪の浪華文会が発行していた雑誌である。奥付によると浪華文会の所在地は「大阪南区北桃谷町五十七番地」、持主は「日柳政愨」とあり、日柳三舟が主宰していた。三舟は当時桃谷に住まいし、その書齋を碧山艸堂といった。磯野秋渚『なには草』（原書は明治三十三年刊、太平文庫影印本、斉田作樂解説、太平書屋、一九九六）に、碧山艸堂を訪ねた記事が掲載されている。また秋渚「浪華の和漢文学」（初出は『文芸倶楽部』第八卷第十号、明治三十五年、前掲太平文庫影印本に所収）では、日柳三舟について次のように述べている。

日柳三舟は、柳東の嗣子にして、才学出藍の称あり。近年病を抱き、久しく癒えず。桃谷の碧山艸堂に隠れ門を閉ぢて、出でず、吟詠して、悶々を消遣す。会心の客来れば、談論風生病の身にあるを覺えざるものゝ如し。今日、浪華の詩をいふもの、先づ指を斯人に屈す。

三舟の父柳東は、讃岐の人。富裕を誇ったが、性豪放にして客を好み、ために産を傾けたという。三舟の代には父ほどでは無かったにしろ、「海内詩媒」が美しい朱墨套印であるのは、あるいは三舟の資力に拠るのかもしれない。「海内詩媒」は、当初は月刊であつたが、後に月二回発行となつた。評正者は末広鉄心、小野湖山、磯野秋渚、馬杉雲外等である。

東京在住の竹磬の詩詞が「海内詩媒」に掲載された経緯について詳細は不明であるが、竹磬の師である馬杉雲外の仲介・推薦があつた可能性が考えられる。馬杉雲外、諱は繫、字は文苞、京都の医師塩山全斎の長子として生まれ、詩文を梁川星巖、森田節齋に学んだ。後に馬杉氏を継いで医術の研鑽を積んだが、尊攘の思いに駆られて国事に奔走し、天誅党の藤本鉄石、松本奎堂らと交わつて弾薬を供給したかどで京都守護の松平容保に捕えられたこともあつた。維新後は天皇に扈從して東京に住み、民部省聴訟判事、民部大録、集議院少主典等を歴任した。明治十年より不忍池畔の上野花園町で温知塾を経営し、また「蓮水吟社」という詩会を開いて、福井六石、藤波仙溪、森川竹磬、田辺松坡、石川二三造らに詩法を教授したという。^⑨竹磬は、後年の作「追挽詩四章」の第三章「馬杉雲外繫先生」(『聴秋仙館詩稿』巻二)に、「蓮塘一醉白鷗眠、老後英雄悟後禪。立雪東台山下路、回頭十有五年前」と詠じ、十五年前の師の姿を追懷している。「海内詩媒」所収の竹磬詩の幾つかには馬杉雲外の好評が附されており、当時の竹磬の作品から雲外が佳作を選んで「海内詩媒」に推挽したのではないかと思われる。

「海内詩媒」は、残念ながら各所蔵機関においても全号の所蔵を確認することができず、今のところその網羅的な調査は困難である。以下に紹介する詩八首は、管見の及んだ範囲からのみの輯佚であり、今後さらに補うべき作品が現れる可能性もあることを附言しておきたい。

〔詩八首〕

○万竿煙雨圖（「海内詩媒」第五十集、明治十八年十二月）

鳳尾凌天是眞性、虚心貞節勢何勁。

煙雨紛紛趣逾清、忽聞鏘鏗佩環鳴。

愛此万竿翠欲滴、想見湘瀟秋雨夕。

不知何日化為龍、且伴晋時林下客。

○寄竹祝和歌題為金子孤芳囑（「海内詩媒」第七十八集、明治二十年二月）

梳風沐雨節愈高、嚴霜密雪不敢撓。

亭亭成陰似雄豪、碧玉琅玕碧於膏。

矗梢千仞勢如刀、蟠龍躍淵鳳翔翱。

此時始脫霜雪勞、君子之稱非過褒。

○林和靖觀梅圖（「海内詩媒」第八十集、明治二十年三月）

脈脈清香曲澗浜、南枝如笑北枝顰。

先生已脫寒暄世、長為梅花作主人。

○春夜（春季雜詠三十首之一）（「海内詩媒」第八十二集、明治二十年四月）

隔簾低唱莫愁歌、樓上夜深思奈何。
一曲清琴人未寐、玉桜花外月光多。

○對雪〔海内詩媒〕第一〇三集、明治二十一年二月

密雲慘淡封野逕、風動林梢力更勁。
須臾玉塵飛颼颼、山河天地一齊淨。
寒氣先侵白板扉、清光又透碧紗幃。
村南村北人跡斷、山後山前鵝毛散。
章台街裏柳絮飛、大庾嶺頭梅花披。
不香花外花敷地、無影月中月滿籬。
只見歸鴉影分明、孤雀一聲何處歸。
忽驚堆塩已一尺、可憐村衵亦絕跡。
乾坤一白銀世界、勝他趙氏連城壁。
疏鐘幾杵響蕭蕭、声声斷続暮寂寞。
對酒賦詩自風流、風流何讓王子猷。
憂然有声呼童問、翠竹只今無恙不。

○春昼〔海内詩媒〕第一〇四集、明治二十一年三月

落花芳草午眠驚、一炷香煙縷縷輕。
深院日長無一事、臥聞廉外懶鶯聲。

○新柳〔海内詩媒〕第一〇六集、明治二十一年四月

初見鵝黃弄翹塵、舞客嬌態可憐春。
風前知是絲絲影、未管暮江相別人。

○春詞 原五〔海内詩媒〕第一〇八集、明治二十一年五月

杜牧三生未了因、江南細雨賦傷春。
落花芳草天涯恨、也作沮風中酒人。

三、「鷗夢新誌」第一集至第二十集所收詩詞文

明治十九（一八八六）年一月、竹磴、藤沢竹所、篠崎柳園（後に中村と改姓）等は鷗夢吟社を設立し、その会誌として「鷗夢新誌」を刊行した。第一集は明治十九年一月二十日刊、奥付には「発行所 東京牛込区白銀町三十一番地 鷗夢吟社」、「持主兼編輯人 野間金五郎」と見える。鷗夢吟社の住所は、第二集では「牛込区津久戸前町十五番地」に変わり、第十二集に至って竹磴の住所である「東京麹町区三番町三十四番地」に変更されている。また「持主」も第十二集から村田徽典となっている^⑪。

竹磴、竹所、柳園は、いずれも雲外の門生であり、第一集の巻頭に溝口桂巖の題言を冠し、また「例言」に「此篇評閱、係于馬杉雲外先生一手」とうたうなど、「鷗夢新誌」は桂巖、雲外門の作品発表の場として発刊されたようである。「葦竹新篇」第十二集が明治十八年十月の刊行なので、あるいは「葦竹新篇」を發展的に解消して「鷗夢新誌」が経営されたのかもしれない。

各集には「文苑錦華」（文）、「詩壇玉燭」（詩）、「闕詩」、「歌林国香」（和歌）欄などが設けられ、また第三集からは竹磴の「詩文叢話」が連載されている。「詩文叢話」は、漢字仮名交じり文の詩話で、竹磴の学詩の跡が窺われて興味深い。後には「詩余」欄が作られて、「鷗夢新誌」は明治における詞の一大拠点となるが、竹磴十代の頃にはまだ詞は前面には出されていなかった^⑩。

なお、「鷗夢新誌」第十九集（明治二十年七月）の「弘報」欄に、下記のような記事が見えている。

小生曾テ旧稿ヲ編シ鷗夢楼詩集ト称シ友人ノ序文題詞ヲ本誌ヘ掲載セシ処社員諸君中或ハ出版セシカノ御問合有之候処右ハ全ク保存ノ為メニ謄写セシ者ニテ決シテ出版等ノ事ハ無之候間左様御承知被下度候一々御返事可申上ノ処多忙中誌上ヲ以テ右御報知申上候也

丁亥七月

森川竹磴拜

文中の「友人ノ序文題詞」とは、たとえば第十六集に掲載された平田耕石の「鷗夢楼詩集題詞三首之一」などを指す^⑪。それらを見た鷗夢吟社社員から、「鷗夢楼詩集」出版のことについて問い合わせを受けたというのである。この一文から、竹磴が当然のことながら自らの詩稿の保存と整理に心を配っていたという事実と、まだ若い竹磴の詩集刊行に注意を払っていた読者の存在を知ることができ、面白く思われる。

「鷗夢新誌」は、明治四十一年三月発行の第一四一集に至って終刊となる。この間、病氣等の理由で休刊となる

こともあつたが、二十年以上にわたつてほぼ独力で雑誌を発行し続けた努力には驚嘆するほかない。

ただ非常に残念ながら、「鷗夢新誌」もさきの「海内詩媒」と同じく、いまだ全号の所在を確認できていない。本稿では竹礫十代の作品として「鷗夢新誌」第一集から第二十集（明治二十年八月刊）より詩詞文を拾つたが、この間の第七集から十集までと、また二十一集以降二十五集までについてもなお未見である。その他にも欠号が多く、将来、この部分も含めてすべての号が揃い、「鷗夢新誌」という竹礫の大業の全貌が明らかにされる日を待ちたい。

〔文二篇〕

○瘦石詩集序（「鷗夢新誌」第六集、明治十九年六月）

心之所之之謂志、志之発於声之謂詩。発於声而成辞、応於辞而成声。余故曰、心正則志正、志正則声正。故愁思之声適、懽愉之声緩。而躁易之人則其声浮、温雅之人則其声麗。由是言之、詩之貴性情、不待喋喋之弁也。苟無性情之感、則詩亦不成也。花開而有風散之、則感而詩成焉。月明而有雲掩之、則感而詩成焉。黃鳥鳴而報春、則感而詩成焉。寒蛩吟而傷秋、則感而詩成焉。不啻貴性情、亦不可無所感也。若無性情、無所感、則只綴字而已。豈可謂之詩哉。不啻性情与所感、不可復無格調也。其格正、其調高、然而其寄托模糊隱邃者、是為上乘焉。若夫山岳之巍巍、河海之洋洋、松風颼颼、竹雨冷冷、千状万態、感其情者、不可勝言也。頃者、友人士声編其詩、名曰瘦石詩集、属序於余。余与士声有知遇之誼、乃不可以不才而辞焉。士声天資温雅、夙出入經史、才藻超凡。乃資性与学業、已如此。其詩之寄托格調、可推知也。今閱此卷數十百篇、格正調高、其寄托莫不模糊隱邃者焉。是足以知其人之温雅矣。而其愁思者、使人揮淚。其懽愉者、使人拍掌。不毫見浮華也。況有如山岳巍巍者、有如河海洋洋者。且士声自命其書齋曰聽松巢、静坐聽松風颼颼、竹雨冷冷。故其詩有如松風之声、又有如竹

雨之響。蓋土声之詩、出于清而入于明、出于明而入于宋、出于宋而入于唐焉。然熟玩之、則非唐也。非宋也。非明也。非清也。別出一機軸、土声之業可謂勉矣。今也流於浮華、以綴字為業者、甚多矣。独土声以溫雅之性、巍巍洋洋、高調正格、皆出於其心。昔者李青蓮有仙骨、故其詩有仙風。余於土声亦言焉。土声、東京人。姓三好、名鐘。瘦石其別号也。明治丙戌暮春、竹磯逸史森川鍵、書於三番坊之竹風鏘鏗如佩環鳴処。

○管仲論（『鷗夢新誌』第十七集、明治二十年五月）

人臣事君、非始之難也、終之為難也。管仲相桓公、霸諸侯攘戎狄。終其身齊國富強、諸侯不叛。管仲死、豎刁易牙開方用。桓公薨於乱、五公子爭立。其禍蔓延、至簡公齊無寧歲。蘇老泉責仲臨死不拳賢自代焉。吾意不然。管仲之罪、在不立世子。何者仲相桓公霸諸侯、一匡天下、厥功偉矣。然昧於大義。桓公薨、五公子爭立、尸虫出戶、是誰之過乎。礼曰、国君無嫡、則立長。長均則立賢。仲早挾五子白諸公、而立儲嗣、桓公必從之。然後選群臣之賢如隰朋賓胥無者、為之師傳、其誰敢爭焉。計不出於此、而属孝公於宋。孝公若賢、則宜早立之。苟不賢、則不宜属諸宋。既属諸宋、不宜使公聽豎刁之請、以立無詭也。嗚呼、仲不知礼者歟。国莫大於立儲嗣者。然仲不足言之耶。抑言之而公不用之耶。仲固為公所畏懼、公何不從之有。人臣之義、言而不從、則当諫。諫而不從、則当去也。仲之書不紀此事、則當時仲未嘗言之也明矣。桓公殺公子糾、召忽死之、人臣之正也。管仲不死、又從而相之、人臣之逆也。子路子貢責之、是矣。然孔子置忽而称仲何耶。忠不見称、不忠不見斥、而反譽之、豈孔子有過舉歟。曰、孔子之言誠是也。糾弟而桓兄也。弟不宜与兄爭、仲当諫之於未發。若仲不知而妄援糾、則為不智。知而不諫、為不忠。是二者莫一可者焉。仲誤糾於其始、及糾已死、亦不以身殉之、而反事其糾之讎。猶是謂無罪、則天下無復有有罪之人也。又何以責天下後世之為人臣而不忠者哉。然則孔子何以置忽而称仲。曰、

召忽之忠与管仲之不忠、人皆知之矣。而仲之功、人或不知之也。故孔子称之。君子顯微、是之謂歟。夫豎刁易牙開方三子、固三匹夫也。仲何不早去之。曰、不去亦可也。何者、斥賢早立儲嗣、儲嗣既賢、則三子又何為。然仲實為三子所忌。一旦無仲、則三子無所憚、桓公亦無所畏。自古儲嗣未定、而不為國家之患者鮮矣。梁武帝、隋高祖、宋文帝危其身、唐玄宗、宋寧宗危其國。皆是坐之耳。故如張良、李泌、包拯、歐陽修、李燾、皆深計遠慮、直言強諫、以定國儲為本、天下以安。豈可不懼哉。豈可不慎哉。詩曰、靡不有初、鮮克有終。仲之謂歟。嗚呼、興齊國者管仲也、乱齊國者管仲也。書曰、一言僨事、一人定國、有旨哉。

〔詩三十四首〕

○新年作五首 節三〔鷗夢新誌〕第一集、明治十九年一月

清鷄報曉万千扉、旭旆光中拝旭暉。
昨夜憂聞寺鐘響、今朝喜見紙鳶飛。
西山白雪寒風勁、東海彩雲祥氣滋。
迎歲太平何限樂、磠生吾亦着新衣。

洪鈞一軋是佳辰、掃尽旧塵貧富均。
已見祥煙籠紫陌、又看瑞靄罩高宸。
千門万戸旭旗閃、緑竹青松春色新。
無復鷄林争鬪事、今年不似去年春。

八洲無処不平安、塵海且欣無怒瀾。
陋巷童兒着華履、紫街人士戴峨冠。
三杯竹葉纔添暖、一朵梅花始破寒。
殿上縉紳新受寵、可知海內聖恩寬。

○春曉二首 錄一（「鷗夢新誌」第三集、明治十九年三月）

起見西窓月似鎌、東天早已曉光添。
夢魂誰惹鶯歌海、春意方濃燕子簾。
風馥郁辺梅淡淡、烟模糊処柳纖纖。
夜來膏雨更無響、只有檐頭余滴霑。

○春季三十詠之八（「鷗夢新誌」第五集、明治十九年五月）

紫燕低飛不動塵、蓬蓬滿目豈堪春。
落花狼藉紅痕綠、冷雨寒烟愁殺人。
春草

十分春思自今加、何只紙鳶披彩霞。
竹外一枝君看取、暗香吹放白梅花。
春風

嗷嗷幾隊入雲飛、春事滿城猶未非。
燕子能憐渠意否、北天千里負花歸。
春雁

咫尺蒼濛曉冷然、且遮暄日撲欄干。
羅帷影暗無人捲、鳥語花香共渺漫。
春霧

盡日無人褰翠帷、四簷風冷滴聲微。
海棠花外春眠後、坐見霏霏濕燕衣。
春雨

雨後園中喜欲狂、九春心事為花忙。
紅桜落尽風駘蕩、又慕薔薇一架香。
春蝶

早鶯無語柳眉顰、休道池心春色新。
比昨今朝雖稍薄、波光未見碧鱗鱗。
春水

高弘紅樓低弘塵、嫩枝攀折欲傷神。
多情本是無情樹、嘗不迎人只送人。
春柳

○南総紀行 続稿（「鷗夢新誌」第十一集、明治十九年十二月）

不似都門錦作幃、野餐之味転為非。

渡舟辞客何辺繫、唯見白鷗三四飛。
是日正午十二辰、達浜野村加餐。

草掩平原望渺茫、吟蛩唧唧断愁腸。

野翁騎馬知何意、莫是当年古戰場。
発浜野村、抵小沢村途上所見。

四顧茫茫海歟田、百舌声白蕎花辺。

烟波入眼如平地、駐杖看疑別有天。
全上。自註、回頭遥望海、故及。

松風一路覺微涼、車上却嫌秋日長。

鬱鬱深林人不見、隔雲樵唱送斜陽。
全上。

恰似仲春三月時、微風陣陣払吟衣。

輕烟一抹籠林樹、無數蜻蜓追煖飛。
全上。

暗蛩声裡暗愁発、話尽襟胸情未歇。

縱令客窓風物殊、一痕唯有故園月。下午七辰、達鈴木氏宅、此夜有作。

喚雨羣蛙与百舌、声声裏逗斜陽。

稻田千頃秋將熟、一半青青一半黃。口占。

西風颯颯夢魂驚、点滴声交蟋蟀声。

孤枕夜寒鄉思切、愁灯聽雨過三更。十月一日夜風雨、有作。

猶有半天殘月明、客衣風冷曉光清。

群鴉不管孤筇恨、五五三三成隊鳴。全五日朝、発鈴木氏宅、就歸途口吟。

一庭松菊俱依然、阿母欣欣意氣新。

昨夜他鄉作孤客、今宵復是故鄉人。歸家口号。

○丙戌十二月二十七日、過東海樓、樓主磯部超夫号東海学人。因分其四字為韵、賦短古四首而呈。（鷗夢新誌第十三集、明治二十年一月）

遠山含雪白、西窓夕陽紅。

瓶梅先春笑、馥郁清香通。

對坐評詩俱屈指、待他淑氣至自東。

秋雨又春風、優游身自在。

羨君閑閱書、由來胸磊磊。

犂牛之子猶可用、何況才學如滄海。

莫是幽人居、門外絕剝啄。

盡日高樓上、弄筆花生握。

想見車孫再生來、雪案螢燈不倦學。

樓与富岳對、門与礪川隣。

岳戴九冬雪、川洗点塵新。

好拋紛紛世情去、殘臙相伴高臥人。

○丁亥新年作（『鷗夢新誌』第十三集、明治二十年一月）

千門萬戶鷄犬声、紅旭三竿春意生。

清鶴鳴過碧落界、東風吹遍洛陽城。

椒酒數杯纔添煖、瓶梅一朵已放唇。

海安無復波濤響、草堂何況自在身。
紙鷺声交車轂音、羽子歌翻馬蹄塵。
伴竹寒窓且靜坐、欸冬花發冷香繁。
閑身第一向人誇、不祝春陽叩朱門。

○無題代人（『鷗夢新誌』第十五集、明治二十年三月）

織錦文成淚滴箋、斑斑如雨輒潜然。
鴛鴦双睡添新恨、翡翠孤飛憶旧緣。
欹枕秋宵雁声冷、倚欄春曉燕情牽。
不知何日得相伴、花下楼台月下船。

再疊韵

郎君手跡染雲箋、朝暮對看心鬱然。
生別離猶死別離、惡因緣似良因緣。
酒痕衣上淚空落、灯影窓前恨轉牽。
記得清風明月夕、二州橋畔繫紅船。

三疊韵

慵向春風浣錦箋、感來心事轉茫然。
並頭花下背良約、連理樹邊違夙緣。
情裏含情情不絕、夢余結夢夢相牽。
夕陽光外池塘立、亂絮紛紛撲画船。

四疊韻

寫纏綿字染華箋、情緒纏綿淚濺然。
落月飛花元有恨、殘山剩水豈無緣。
閱來人世腸千斷、去盡雲烟夢一牽。
耿耿中宵睡猶未、追思嘗上採蓮船。

五疊韻

一枝彤管一紅箋、心事如雲易黯然。
野馬游絲追旧夢、山花落月記前緣。
雨中灯影冷腸斷、風外笛声愁緒牽。
夜夜思郎眠不就、欲望天畔上長船。

火雲散尽好涼滋、驅熱清風次第吹。
茉莉香边弄杯处、芙蓉影裏賦詩時。
由来一斗何憂醉、至竟三生不免痴。
今夜情人成底事、天涯只有月明知。

掛欄花發玉容妍、争奈愁人不就眠。
涼露虫声追旧夢、冷風月色記前緣。
恨当無恨恨難絶、歡至有歡歡忽遷。
低垂小樓灯影下、隔簾厭厭聽夫憐。

〔詞三闋〕

○浣溪紗 薔薇〔鷗夢新誌〕第六集、明治十九年六月
長朵裊裊葉更肥。吹來風靜偃羅帷。憑誰排匣理明妃。
密蕊度香翻宿蝶、春閨人倚玉扃扉。思看秦女愛芳菲。

○調笑令 晚步〔鷗夢新誌〕第六集、明治十九年六月
携杖。携杖。欲散襟懷炎快。前山斂尽斜陽。緩步微吟趁涼。涼趁。涼趁。皎月清風陣陣。

○如夢令 冬夜（『鷗夢新誌』第十三集、明治二十年一月）

小院殘灯明滅。剛是嚴寒時節。香夢忽醒來、衾枕冷然氷鉄。淒絶。淒絶。折竹数声堆雪。

なお、最後の「如夢令」詞は、「海内詩媒」第一〇〇集（明治二十一年一月）にも再録されている。

注

① 拙稿「森川竹磔の詞論研究について」（『学林』第三十九号所収、二〇〇四）においては、生前に出版された竹磔編著の単行本を十種としていたが、その後、『雁門絶句抄』という書物の存在を確認したため、十一種と改めたい。『雁門絶句抄』は、元・薩都刺の絶句に高野清雄（竹隱）が注を施し、それを竹磔が編集したもので、奥付には「大正三年七月十一日発行」「編輯兼発行 者 森川鍵蔵」「発行所 鷗夢吟社」等と見えている。

② 水原琴窓氏「填詞專家森川竹磔先生の想い出」（『聴秋仙館詩稿』所収、森川竹磔遺稿刊行会、一九六七）において「森春濤の『春濤詩鈔』二十卷、森槐南の『槐南集』二十八卷、この編輯にあたつて、門下の間で大騒ぎをしたが、結局、学才においては竹磔先生の右に出るものがなく、そこで前記の両書の編輯は、先生ということになったわけであるが、それほどまでの経験を味わった先生がどうして生前に詩詞稿を整理しておかなかったものかと、不思議に思われる」と述べておられる。

③ 一九九二年七月刊の『詞学』第九輯（華東師範大学出版社）に、『夢余稿』の書影が掲載されている。水原氏は、『夢余稿』の体裁について『夢余稿』は唐装の四巻一帙からなり、森川竹磔遺著と記した関沢霞庵の題簽がある。霞庵の署印には、「我思古人」とある。四百字詰の卦紙の美濃紙に書かれ、欄枠の左下には松屋製という印刷の文字があるから、市販の卦紙を用いたもの

と思われる。本文の後尾に天・隨の二印があり、表紙の裏には『久保天随秘蔵圖書』の印がある。詩集二巻と詞集二巻とからなり、詞集の後末に曲が附けられている（『夢余稿詩集編校記』、『聴秋仙館詩稿』所収）と記されている。なお、神田喜一郎博士の『日本における中国文学Ⅱ』（『神田喜一郎全集』第七巻、同朋舎出版、一九八六）に「彼はまた後年になって、明治四十一年三月発行の『鷗夢新誌』第百四十一集に『夢余稿』と題し、多くの旧作を摭拾して載せてゐる」（十四頁）とあり、この事実も『夢余稿』が竹礫手編であることを示す傍証となろう。ただ、『鷗夢新誌』第一四一集は各所蔵機関に所蔵が無く、残念ながら未見である。

④ ただし第十集「報告」欄に「生義從來本館々務二從事セシ今般任二相州横須賀ニ赴ク、因テ不得已茲ニ館務從事ヲ辞ス之フ江湖諸君幸ニ旧ニ不違受顧ヲ垂レヨ 乙酉八月 在横須賀 沖洲 森本鉾 白」と有り、第十集以降、森本鉾太郎は編集業務から離れている。

⑤ 拙稿「『鷗夢新誌』発刊までの森川竹礫」（『立命館文学』第五九八号所収、二〇〇七）参照。

⑥ 第一集から第三集までは「東京麹町区三番町三十四番地 松莊館」とあるが、第三集「報告」欄に「本館都合ニヨリ来二月一日ヨリ麹町区三番町卅三番地へ移転ス 附言館員諸子ノ都合ニヨリ旧番地へ森川竹礫宛ニテ投稿スルモ妨ゲナシ」と見え、松莊館は、何らかの事情で第四集からは「三十三番地」へ移転している。「三十三番地」は、清田黙快雨の居所であった。ただし、第十集「館告」欄に「本館都合ニヨリ九月一日ヨリ麹町区三番町参拾四番地へ移転ス」と記され、第十一・十二集は「三十四番地」に復している。

⑦ 神田喜一郎編『明治漢詩文集』「大江敬香略歴」（『略歴』は中村忠行編。明治文学全集第六十二巻、筑摩書房、一九八三）参照。

⑧ 水原渭江氏「磯野秋渚の『なには草』（『近代上方における中国文学』下冊所収、オーム社書店、一九七〇）に、関連する補足記事が見えている。

⑨ 馬杉雲外の伝記は、山本之寛氏「文節馬杉繫先生伝」（『雲外余彩』所収）が最も詳しい。また水原渭江氏に「馬杉雲外について」

という一文がある（『近代上方における中国文学』下冊所収）。

⑩ たとえば「万竿煙雨図」詩には「筆力雄勁」、また「寄竹祝和歌題為金子孤芳囑」詩には「蠹梢千仞、蟠龍躍淵、対尤雄勁。全篇筆力、其在於此歟」との評が附されている。

⑪ さらに第十六集からは、清田黙に変更されている。

⑫ ただし第六集及び八集には「詩余」欄が存し、竹磎等の作品が掲載されている。

⑬ 平田耕石「鷗夢樓詩集題詞三首之一」は「擲却塵懷俗累無、春山秋水似操觚。滿牀書帙珍而美、幾卷詩篇約不蕪。脩竹古松移倚石、早梅寒菊伴烹茶。清閑端坐吟哦處、匹似白鷗浮綠湖。」と詠じている。

附記

「海内詩媒」所収の竹磎詩詞に関しては、立命館大学文学部の芳村弘道氏より御教示を忝くした。特に記して厚く御礼申し上げる。

本稿は、平成十八・十九年度科学研究費補助金（基盤研究C）・研究課題名「日本における詞の収集と整理」（課題番号一八五二〇一一二）による研究成果の一部である。